

2024 年度
第 11 回ブックショートアワード

ニードル刺す姫

かぐやま
香久山 ゆみ

- 作品タイトル・・・ニードル刺す姫
- 元にした作品のタイトル・・・茨姫(グリム童話)
- 著者名・・・香久山 ゆみ (かぐやま ゆみ)
- あらすじ(140 字)

最近の趣味は羊毛フェルトのマスコット作り。ふわふわの羊毛に、専用の針を刺すことで繊維を絡め、形をまとめていく。そうして作った森の動物達とともに、私は冒険の旅に出る。魔女に囚われた姫を救うのだ。……って、は？ 私はただのアラフォー会社員なんですけども……。

- 文字数・・・3,459 字

ニードル刺す姫

ちくちくちくちく。

羊毛フェルトにはまっている。

カラフルな羊毛の束に、何度も何度も針を刺して、繊維を絡めてフェルト状にしていき、マスコットなどを製作する。

独身アラフォーの我が身は、アフターファイブが手持ち無沙汰で、たまたま見つけた百均の羊毛フェルト入門キットに挑戦して、それが案外うまく出来たものだから、ここにきて才能開花か、もしかしてネット販売とか新たな道が拓けるのでは。なんて、我ながらどこまで本気か分かったものじゃないけれど、以来、ちくちくちくちく羊毛フェルトでマスコット作りに勤しんでいる。

小器用なものだから、大体のものはお手本通りに完成させられる。

けど、所詮は「お手本通り」止まりなのだ。凡人で、才能がないから。ゼロから新たなものを生み出す才覚はないのである。また、「植毛フェルト」やら「石鹼水で布状にして」やら、少し難易度が上がったり、手間が掛かると、途端に面倒になる。

要するに、趣味の範疇である。何にもならない。

けれど、ちくちくちくちく。暇さえあれば針を刺している。その間は無心でいられるから。仕事のことも結婚のことも親のことも将来のことも、何も考えずにいられるから。

「——あっ！」

ぼうっとしていたら、ぐさりと針（ニードル）で指を刺す。

羊毛フェルト用の針は、細い分だけ深く刺さる。そして、羊毛をフェルト状にするために細かなギザギザが刻まれており、けっこう痛い。針を抜いてしばらくしてからじわっと血が滲む。ティッシュを一枚取り、ぎゅっと指を押さえる。極細い傷口だから、しばらく抑えていればじきに塞がる。

人差し指を押さえながら、ごろんとカーペットの上に横になる。

じっと目を閉じる。

なにしてんだろ。

独り身で、もくもくと羊毛フェルトを作って。もっと他にやることがあるだろうに。何を？ 何も考えたくないから、ちくちくちくちく針を刺して羊毛を絡めていく。

指に針を刺して倒れるなんて、まるで茨姫みたいね。

そんな馬鹿なことを考える。

でも、あーほんとにこのまま百年の眠りに就いてしまってもいいのに。それで、王子様が迎えに来るまで、絶対に目を開けないんだから。

——なんてね。

明日も仕事だが、キリのいいところまで作業を進めておきたい。もう深夜0時を回ったのだろうか。ばかだ。いい齡なんだから、あまり夜更かししたら明日に堪える。誰に求められるでもない趣味に無駄に時間を割くななんて、ほんと馬鹿。

溜め息を一つだけ吐いて、目を開ける。

え？

ええ??

えええー???

目を開けると、森の中にいた。ネコヤリスやコグマやカワウソや、いろんな小動物たち

ニードル刺す姫

が私の顔を覗き込んでいる。

「きゃああ！」

掠れた悲鳴を上げると、きゃああ！と動物達もまねっこして騒ぐ。

なに？ 困む動物達には見覚えがあった。私が羊毛フェルトで作った作品達だ。

掌に載るほどの大きさだったはずが、私とほとんど変わらない大きさで、立ったり座ったりしている。この子達が大きくなったのか？ それとも私が小さくなったのか？

私が小さくなったのだ。

ということはすぐに判明した。使い慣れた針（ニードル）が、腰までの高さで脇の地面に突き刺さっている。

夢だ。明日仕事だし、起きなきゃ。

そう思うけれど、醒めない。

森の奥の方からはギャアギャアと野禽の不穏な鳴き声が轟く。私の動物達は、小さく集まってぷるぷる震えている。

仕方がないな。

地面に刺さった針を抜いて、腰に刺す。まるで一寸法師だ。

なんて思っていたら、動物達がわあわあ声を上げる。

「しゅごいれす！」

「てんさいだ！」

「伝説の剣を抜くことができるのは、勇者にちがいないでしゅ！」

そう煽てられると、満更でもない。

針を指に刺して百年眠っている間に、どうやら私は世界を救う勇者になったらしい。

あれ？ 王子様が起こしに来てくれるのではなかったのか。

きよろきよろ辺りを見回すも、王子は不在である。この子達は愛らしいし、まあいいか。

森の奥には、悪い魔女により茨に覆われて百年の眠りについての城があり、眠り姫が助けを待っているらしい。

私には縁もゆかりもないことだし、放っておいても姫ならそのうち王子様が助けに来るだろうと思うのだが、この子達がやかましいので、仕方がない、私は姫を救いに森の奥へ進むことにした。

森は鬱蒼として、進む先は薄暗く見通せないが、私の動物達がいっしょについてきてくれるので、まったく怖くもない。

がんがん森を進み、城を囲む茨も腰にさした針を振るってざくざく避けていく。

城の中に入ると、さらに茨は深く絡まり、行く手を阻む。けれど、進むしかない。私が針を振ると、動物達も協力して「よいちょ、よいちょ」と一生懸命茨を解いていってくれる。茨にからまってほどけてしまった動物達の羊毛を、ちくちくちくちく私はまた補修してやる。「ありがとお！」と動物達が笑顔を向ける。頭を撫でてやる。

城の一番奥の部屋まで辿り着く。

天蓋に包まれた寝台の上に、誰かが横たわっている。

「姫でしゅ！」

「魔女でしゅ！」

動物達がめいめいに騒ぐ。え、どっち？

とはいえ、寝台の上の人物は眠っているようだから、まあどちらでも構わない。魔女ならやっつけるチャンスだし。

そろそろと音を立てないように、天蓋のレースをめくる。ともするとすぐに騒ごうとする動物達を静めながら。

レースのカーテンを開く。

そこに眠るのは、私自身だった。

眉間にしわを寄せながらすうすう眠っている。ちょっといびきをかいている。たまに「うん」となる。起きそうにはない。

「これは……」

どうしたものか。

「姫でしゅ」

「魔女でしゅ」

とりあえず「姫」と言った動物の頭を撫でる。「魔女」と言った動物がかなしそうにするので、仕方ないからそっちも撫でる。

見下ろす私は、寝顔からさえ疲れが見て取れる。こうして改めてみると、齢を重ねたなあとも思うし、案外若い顔をしているなあとも思う。のん気な姫のようでもあるし、世界を呪う魔女のようでもある。

姫なら起こして、魔女ならやっつけねばならない。

けど、自分に口づけするってのもなあ。かといって、眠る自分の心臓に針を深く付き立てるのも気が引ける。

それにしても大分うなされているな。

よく見ると、眠る私の体のあちこちからほろほろと羊毛がほどけている。そっと手で撫でて毛羽立った部分を抑え、針でやさしくちくちくちくちく直していく。元からそうだったのかどこかで失ってしまったのか、羊毛が薄いところもある。

「どうじょ」と動物達がふかふかの羊毛を手渡してくれるので、それを使ってちくちくちくちく羊毛を足していく。真っ白な顔をしているから、頬には朱色の羊毛を少し足しておく。羊毛を持ってきた子たちの頭をいちいち撫でてやらねばならないから、なかなか忙しい。

ちくちくちくちくちくちくちくちく。

眠る私の顔はすっかり良くなり、それはもう姫でも魔女でもなく、紛れもない私自身なのだった。

自分をいたわってやったことにすっかり満足すると、眠くなってきた。

「眠い……」

と呟くと、私の動物達が私の周りにぎゅうっと集まってくる。ぬいぐるみほどではないけれど温かい。眠い。動物達の体をぎゅっと抱きしめると、妙な安心感がある。眠い。動物達も小さな手で私をぎゅっとする。ふうふうと動物達の方が先に眠り出す。寝息が耳に心地よい。眠い。細かい羊毛が鼻腔をくすぐる。

「くしゅん！」

くしゃみをして目が覚めた。

いつもの自分の家の自分の部屋だ。ぼーっとした頭で時計を見ると、深夜2時。横にな

ニードル刺す姫

ったまま、うつらうつら眠ってしまっていたようだ。

何か夢を見ていた気がするけれど、思い出せない。

作りかけのウサギのマスコットがテーブルから落ちて胸の上に乗っかっている。まだ固まっていないふわふわの羊毛をそっと撫でて、テーブルに戻す。キリのいいところまで進めたかったが、今日はここまで。

さっと温かいシャワーを浴びて、布団で寝る。明日も仕事だから。

私は私自身を大事にしなければならない。

悩み事はあれこれあるし答えを出すことさえできなかつたりするけれど、それだけは間違えない。……時々間違えるけれど、間違えないようにしたい。

簡単に明日の仕度をしておく。ふと目に入った、昨日完成したばかりのお姫様のマスコット。ぱっちり開いた大きな目は、気が強そう。彼女なら、他人からのちくちくした言葉にも負けなさそうである。

通勤鞆の隅に小さなお姫様をそっと忍ばせて、私は束の間の眠りに落ちた。

〈了〉